

史跡今市大念寺古墳 保存修理事業報告書



1988
出雲市教育委員会

史跡今市大念寺古墳 保存修理事業報告書

1988

出雲市教育委員会



石室甬道部上部版块状互层



填丘北側削落断面近景



墳丘北側削落断面 後円部と前方部の接合部



墳丘北側割落断面石室東側



填丘北側剝落断面石室西側

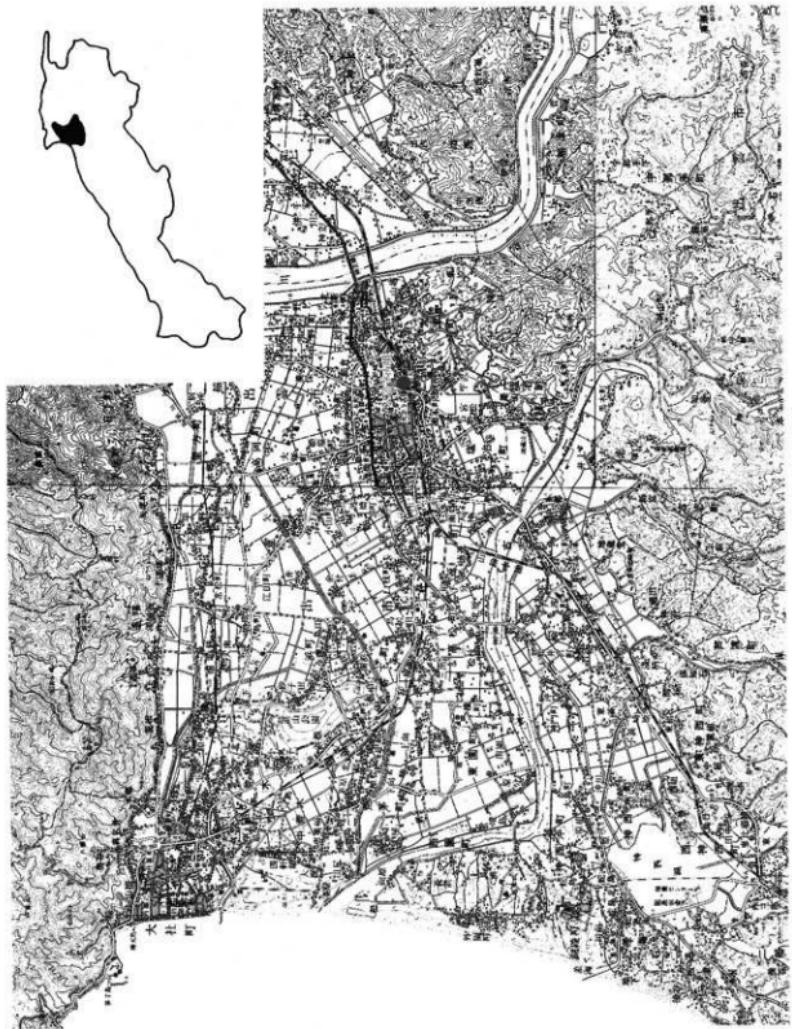


塙丘北側保存修理後の状況



填丘南側保存修理後の状況

図1 今市大念佛古墳位置図



はじめに

今市大念寺古墳は、壮大な横穴式石室や大型家形石棺があることで、全国的によく知られ、大正13年に、国指定史跡になっています。

文政9年、大念寺の境内を拡張するときに発見されましたが、そのために古墳の北側が削られています。また、その後の豪雨災害によっても、墳丘が損なわれその都度、修理がなされています。

昭和55年に、横穴式石室後部の石が落ちたことから、早急な修理が必要となりました。関係機関のご尽力によって、国庫補助事業として、昭和56年度から3カ年を費して、後部付近の保存修理事業を行うことができました。その間、石組解体に伴う調査を行った結果、大念寺古墳が高度な土木技術で築かれていることがわかり、全国的に大きな話題となりましたことは、記憶に新しいところです。

後部付近の保存修理工事は完了しましたが、なお、墳丘が崩れる危険性があったため、ひき続いて、昭和59年度から昭和62年度までの4カ年継続事業として、墳丘北側と南側の保存修理事業を実施しました。

これらの保存修理事業によって、完全とはいえないまでも、後世に伝えるべき貴重な文化遺産として、その名に恥じない姿に生まれ変わったことは、文化財保護行政を推し進める者として、この上ない喜びがあります。

本事業に、ご指導を賜わりました、文化庁をはじめ、奈良国立文化財研究所、島根県教育委員会、調査指導者の諸先生に、厚くお礼申し上げます。また、厳しい自然条件のもとで発掘調査にご協力をいただきました皆様方や、工事関係者の方々に、深く感謝申し上げます。

昭和63年3月

出雲市教育委員会

教育長 石飛 满

例　　言

1. 本書は、出雲市教育委員会が、国庫補助事業として実施した、史跡今市大念寺古墳保存修理事業の報告書である。
2. 史跡今市大念寺古墳保存修理事業は、昭和56年度から昭和58年度までの3カ年間で、石室羨道部付近の保存修理事業を実施し、「史跡今市大念寺古墳保存修理工事報告書」として、昭和58年度に発行している。本書は、昭和59年度から昭和62年度までの4カ年間に実施した、墳丘北側及び南側の保存修理事業を主体として報告している。
3. 本事業の組織については、本文中に別記（P34）している。
4. 本書の編集は、出雲市教育委員会が行ったが、執筆分担については、次の通りである。玉稿を賜わった先生方に、厚くお礼申し上げます。

| | |
|------------------------------------|-------------------------------|
| 川上稔（出雲市教育委員会主事） | 1. 1 4. 1(1)(3) |
| 西尾克己（島根県教育委員会文化課主事） | 1. 2 |
| 角田徳幸（島根県教育委員会文化課主事） | 1. 2 4. 1(3) 4. 4 |
| 今岡 清（出雲市教育委員会前・社会教育課長） | 2. 1 |
| 門脇俊彦（松江市立津田小学校教諭） | 2. 2(1) |
| 川原和人（島根県教育委員会文化課係長） | 2. 2(1) |
| 川上敏明（文化財保存計画協会） | 2. 2(2) 3. 1～5 4. 4 5. 1～6 |
| 三浦 清（島根大学教育学部教授・ 島根県文化財保護審議会委員） | 4. 2 |
| 伊藤晴明（島根大学理学部教授） | 4. 3 |
| 時枝克安（島根大学理学部助教授） | 4. 3 |

5. 本書に掲載している4. 2（出雲市大念寺古墳の築造技術）は、著者と島根考古学会の承認を得て、島根考古学会誌 第3集に掲載された同氏の論文を転載したものである。
6. 本事業については、土地所有者の大念寺をはじめ、指導者の先生方、また、発掘調査にご協力いただいた地元の皆さまに、深く感謝します。

目 次

はじめに

第1章 史跡今市大念寺古墳の概要

| | |
|--------------------------|---|
| 1. 1 古墳の概要..... | 1 |
| 1. 2 出雲平野における古墳の様相 | 5 |

第2章 保存修理事業に至る経緯

| | |
|----------------------|----|
| 2. 1 経緯..... | 13 |
| 2. 2 石室等修理事業の概要..... | 15 |
| (1)調査 | |
| (2)工事 | |

第3章 事業計画

| | |
|--------------------|----|
| 3. 1 目的及び計画方針..... | 26 |
| 3. 2 事業内容 | 29 |
| 調査計画 | |
| 工事計画 | |
| 3. 3 組織..... | 34 |
| 3. 4 事業費..... | 36 |
| 3. 5 工程..... | 38 |

第4章 調査

| | |
|-----------------------|----|
| 4. 1 発掘調査 | 40 |
| (1)調査の概要 | |
| (2)北側墳丘調査 (昭和61年度) | |
| (3)南側墳丘調査 (昭和61・62年度) | |
| 4. 2 土質調査..... | 59 |
| 4. 3 残留磁気測定調査..... | 65 |
| 4. 4 まとめ..... | 72 |

(調査写真)

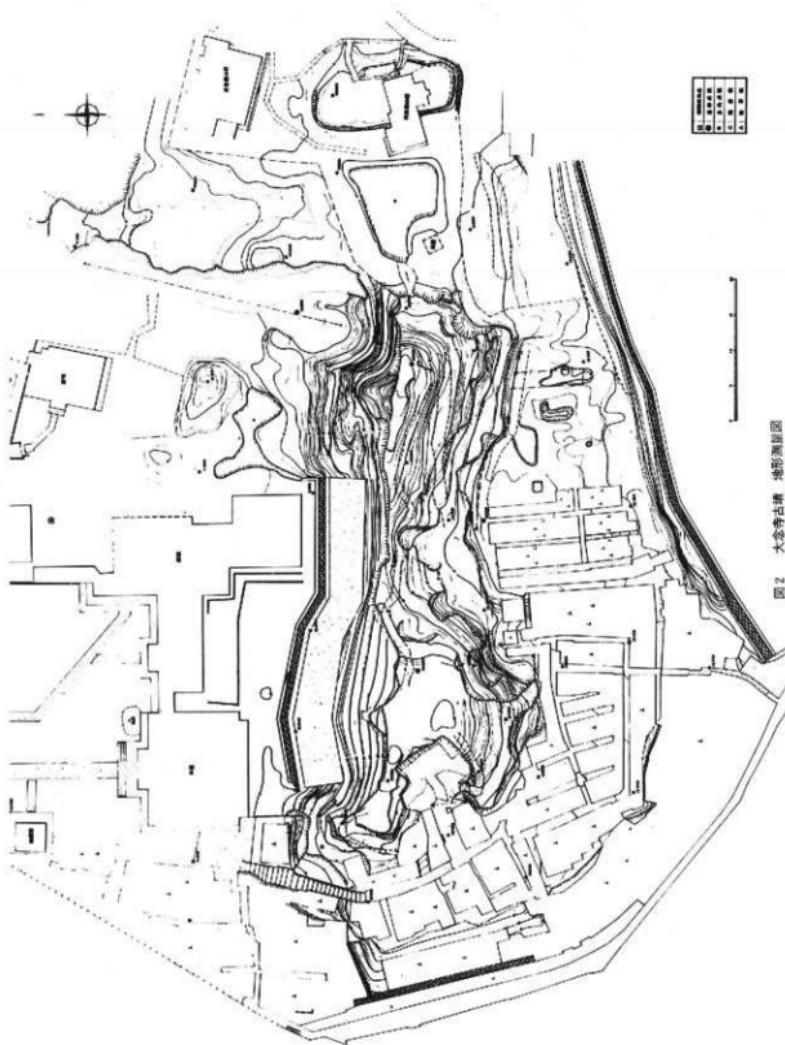
第5章 保存修理工事

| | |
|--------------------|-----|
| 5. 1 修理方針..... | 96 |
| 5. 2 昭和59年度工事..... | 100 |
| 5. 3 昭和60年度工事..... | 103 |
| 5. 4 昭和61年度工事..... | 106 |
| 5. 5 昭和62年度工事..... | 109 |
| 5. 6 まとめ..... | 112 |

(工事図・工事写真)

おわりに.....130

图 2 大念佛寺地形测量图



第1章 史跡今市大念寺古墳の概要

1.1 古墳の概要

今市大念寺古墳は、出雲市街地の東端、出雲市今市町鷹の沢の大念寺裏山にあり、南から突出する丘陵地が、最も北へ派生した先端部の眺望絶佳の地を占めている。

文政9年(1826)、大念寺本堂が再建されたときに横穴式石室が発見されているが、当時の記録に、木版摺りの『岩家岡井寸法宝物目録』などがある。

古墳は、全長100m近い古墳時代後期の前方後円墳で、出雲地方最大の古墳の一つである。築造時期については、従来6世紀後半とされていたが、6世紀中葉とする説^{前田}もある。古墳の被葬者は、西部出雲の政治的結集体のトップに立った人物の墓ともみられている。

横穴式石室には大小二基の横口式石棺をもち、壮大豪放な横穴式石室と大型家形石棺があることから、大正13年12月9日に国指定史跡になっている。

(1) 墳丘

古墳は、東から続く低丘陵の先端部に築造されている。主軸をほぼ東西方向にとり、前方部を東に向いている前方後円墳で、全長は100m近くに達する。古墳の北半分は、文政9年(1826)の大念寺再建や、数度の豪雨災害を被り、失われている。後円部には、西に開口する横穴式石室がある。

墳丘の規模は、一般的に84mとされてきたが、最近の調査によって、全長100m近くはあったといわれている。しかし、前方部の端部が破壊され失われているため、発掘調査によって確証が得られない限り、断定しがたい。

後円部の西から南にかけては平坦面が広がり、現在、墓地になっているが、くびれ部にも一部残っている。この面が墳丘をのせる基壇とみられ、全長140m以上の墓域^{土塁}があったと推定されている。

墳丘の構造については、保存修理事業に伴う石室発掘調査付近の調査(昭和56~57年度)や、墳丘北側削落断面調査(昭和61年度)などによって、貴重な知見が得られている。墳丘の上層観察から、墳丘はほとんどが盛土によって築かれていることがわかったが、構造的にも、性質の異なる土を板築状に互層することによって、墳丘が崩壊しないように高度の土木技術を用いて築造されている。

(2) 横穴式石室

大念寺古墳の横穴式石室は、全長12.8mで、両袖式複室構造になっている。前室は、長さ3.1m、幅2.4m、高さ2mで、北側壁寄りに小型組み合わせ石棺(石棺の基底部のみ現存)を置いている。奥室は、長さ5.8m、幅2.9m、高さ3.3mの長方形プランをとり、北側壁に沿い奥壁寄りに割抜式大型家形石棺がある。石室全長においては上塙治築山古墳にやや劣るとはいえ、壯大さにおいては、山陰で最大の横穴式石室といえる。

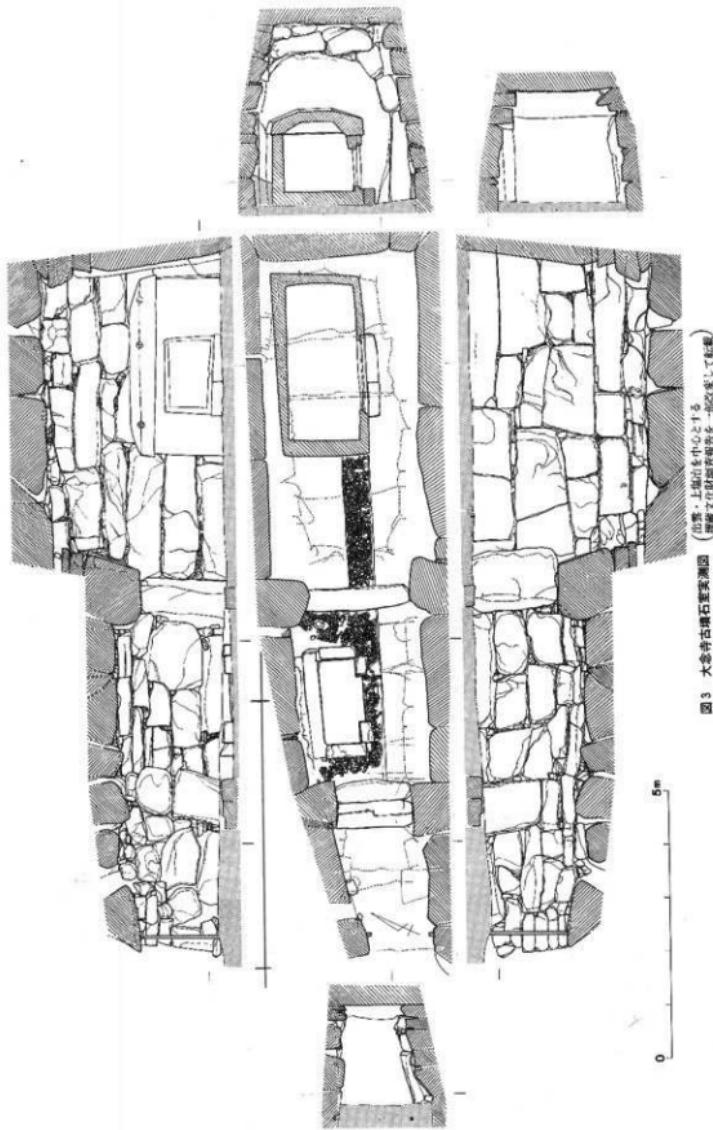


図3 大金井古墳石室実測図
(山梨、上山古墳を中心とする
縄文文化財調査報告を一般公表して既往)

石室プランとしては、奥室はほぼ長方形であるが、羨道部は、南側壁がほぼ直線的のに対し、北側壁を内側に寄せる片寄せの傾向がある。

石材には、自然石のほか、加工した割石を多く用いており、樋石や石棺には、切石の技術もみられる。

昭和58年度の石室内調査で、奥室の石棺が敷石の上に据えられていたことから、側壁腰石を設定し、床面造成後に石棺が置かれたことが推定された。また、前室入口に検出した樋石は、上面に切込みがあることから、二枚の閉塞石があったことが明らかになった。^{注6)}

石室の構築方法としては、前室天井石の高さで一線に揃え、樋石の位置をきめ、奥室壁体上部を積みあげて天井石を架構している。

(3) 石棺

横穴式石室には、大小二基の石棺が、前室、奥室にそれぞれ一基置かれている。

奥室の石棺は、北側壁に沿って奥壁寄りにあり、長さ3.3m、幅1.7m、高さ1.7mの大型家形石棺である。凝灰岩を加工した剥抜式の石棺で、蓋と棺身からなり、横口には閉塞石を受ける切り込みがある。その前には、方柱状の細長い切石が接して置かれており、閉塞石を支えるようになっている。蓋石は、内外面とも家形に加工し、6個の縄掛突起がある。家形石棺としては全国的にも最大規模を誇り、大念寺古墳を特色づけるものとなっている。

前室の石棺は、組み合わせ石棺であるが、奥室の家形石棺よりはかなり小型である。現在は、基底部が残存するに過ぎないが、ガウランドが明治末期に調査したときの記録によると、内法は、長さ1.55m、幅0.74m、深さ0.57mであったという。^{注7)}すでに蓋石はこわれていたらしく、蓋の形状は不明である。

出雲の家形石棺については、「平入り横口式」構造は九州的要素が強いが、蓋と身の形態的特徴と玄室内における空間配置には畿内的色彩が強く、両者の特徴を兼ね備えているといわれ、大念寺古墳奥室の石棺をはじめとする西出雲の剥抜式家形石棺は、より畿内とする指摘がある。^{注8)}

(4) 遺物

大念寺古墳の出土遺物は、横穴式石室の開口が古いため、ほとんどが散逸してしまっている。現存する遺物は、直刀、刀子、鉄斧、鉄鎌、馬具類（轡、雲珠、飾金具）、須恵器（蓋環、甕片）などであり、現在改築された大念寺の庫裡内のショーケースに保存展示されている。

江戸時代の文献などから、出土したとされる遺物を列挙すれば、装身具（金環、丸玉、御履、歩搖）、武器（金銅莊太刀、直刀、鉄斧、鉄矛、石突、鉄鎌、鹿角莊刀子、兜鉢）、馬具（轡、杏葉、雲珠、辻金具、飾金具、金銅鈴、馬鐸）、土器（須恵器）、埴輪（円筒埴輪）などがある。

また、保存修理事業に伴う発掘調査で、石室内から鏡片、金銅製品残片が認められ、墳丘からは、円筒埴輪のほかに土師器片も出土している。

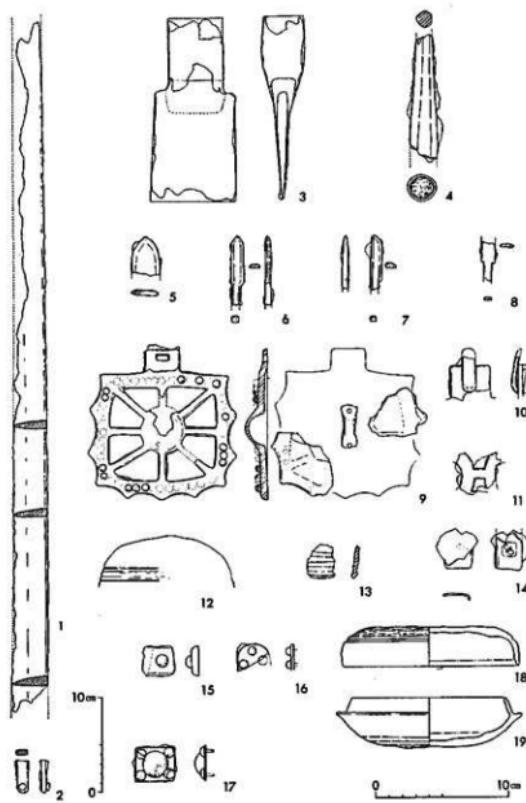


図4 大念寺古墳出土遺物
(西尾良一「ふいーるど・のーと」8から転載)

大念寺古墳の出土遺物のほとんどは、現在見ることはできないが、記録による限りでは、かなりの豊富な遺物であり、被葬者の強大な権力の一端を窺い知ることができる。

注

- (1) 西尾良一「今市・大念寺古墳について（下）」「ふいーるど・のーと」No.8 (1985)
- (2) 渡辺貞幸「山代・大庭古墳群と五・六世紀の出雲」「山陰考古学の諸問題」(1986)
- (3) 「大念寺古墳現地説明会資料」川崎市教育委員会 (1983)
- (4) 川原和人・門脇俊彦「大念寺古墳について」「島根考古学会誌」3 (1986)
- (5) 渡辺貞幸「カウランド氏と山陰の古墳（中）」「八葉立つ風土記の丘」No.39 (1979)
- (6) 和田晴吾「出雲の家形石棺」「展望アジアの考古学」(1983)

1.2 出雲平野における古墳の様相

1. 出雲平野の地形

山陰有数の穀倉地出雲平野は、島根半島と中国山地に挟まれた細長い海岸平野で斐伊川と神戸川の二大河川の沖積作用で徐々に形成され、今日の姿となったのである。それゆえ、縄文時代以降の各時代毎に平野の景観も異なり、人々の生活環境もそれに大きく起因していたと思われる。

大念寺古墳が築造された古墳時代後期の平野の様子は、奈良時代に編纂された『出雲国風土記』(733年)によって、ほんの少しあがくことが出来る。同書によれば、北流する斐伊川(出雲大川)は、平野中央部から西に折れ、神戸川とともに平野西部の大部分をおおっていた神門水海(周囲約18.8km)^{注(1)}に注ぎ、その流域には安定した水田や畠地が存在していたのである。その状況については次のように記載されている。

「河の両辺は、或るは土地豊かに沃えて、土穀、桑、麻、稔り歛枝に、百姓の膏腴の蘭なり、或は土體豊かに沃えて、草木叢生たり。」(出雲大川の条の一部、加藤義成「校注出雲国風土記」より)

一方、尖道湖は現在より相当西に広がり、その汀線は簸川郡斐川町直江付近に位置し、平野はかなり狭かったと推定される。さらに、日本海に面する一帯には沙飛^{さひ}ぶ松山^{まつやま}が、神門水海周囲には草木叢生の低湿地が存在していたのである。このように弥生時代から奈良時代に至る古代の集落は当時の地理的環境に大きく影響され、北山南麓の小規模な扇状地や平野部における二大河川の旧自然堤防および平野南部に位置する低丘陵周縁部に限定して営まれていたのである。

2. 出雲平野の古墳分布

古墳は出雲平野周縁部の山麓のいたるところで見られる。その多くは中期から後期に属するもので、前期の古墳はごく僅かである。現在知られる最古の古墳としては、平野北部の北山山麓に築かれた大寺古墳(出雲市東林木町)が挙げられる。

前方部が低く細長い古式の前方後円墳で、全長は約50mを測り、後円部には長さ4mの竪穴式石室をもつ。副葬品としては鉄斧、鐵鏟、鎌^{注(2)}が出土している。これに續く古墳には、平野の西南部に位置する神西湖を望む丘陵上に築かれた山地古墳(出雲市神西湖町)がある。径24mの円墳で、木棺2基と箱式石棺1基の埋葬施設を有し、仿製鏡と筒形銅器を各2個、管玉17個等の副葬品をもち、築造時期は前中期と推定されている。中期古墳は十分把握されていないが、平野の縁辺部でいくつか確認されている。平野の東部、簸川郡斐川町莊原の草原古墳と神庭岩船古墳が著名である。^{注(4)}前者は低丘陵上に築かれた古墳で、埋葬施設としては長持形石棺をもち、大刀、短甲、玉類、貝輪等の副葬品が知られている。墳丘は山陰本線で削られており、墳形は定かでない。後者は丘陵縁辺部に築かれた前方後円墳(推定約57m)であるが、前方部が削られている。現在、後円部の墳頂部には大きな舟形石棺の蓋石が存在する。一方、平野西部の神西湖付近の丘陵には雲部古墳(簸川郡湖陵町)が

※「家の正面50歩な
り。通り35步74歩あり。」

*曲松山

※奈良時代の出雲都城部^城
にあたり、当時は前面に
尖道湖が広がっていたと
思われる。



圖5 主要古墳分布圖

1. 山柏山古墳
2. 宝圓台古墳
3. 上馬古墳
4. 美濃神社2号墳
5. 大寺古墳
6. 雪谷古墳
7. 仙施古墳
8. 北光寺古墳
9. 天神原古墳
10. 宝塚古墳
11. 杉瀬寺山古墳
12. 放生山古墳
13. 大保古墳
14. 深山古墳
15. 大念寺古墳
16. 番山古墳
17. 地藏山古墳
18. 千分古墳
19. 美明院古墳群
20. 里山古墳群
21. 小西小丸古墳
22. 桜井寺山古墳
23. 銀杏山古墳
24. 高野寺古墳
25. 食糸谷古墳
26. 布子谷古墳
27. 稲荷古墳
28. 水前寺古墳
29. 水前寺古墳
30. 幸原古墳

ある。墓地造成により墳丘は失なわれているが、枕付の舟形石棺を内蔵する。また、神西湖の東側の丘陵上には、全長約60mを測る前方後円墳の北光寺古墳（出雲市東神西町）が築かれている。埋葬施設や副葬品は、未調査のため詳細は不明である。これらの大型古墳以外にも、平野縁辺部では小規模な古墳群が散見される。これらの古墳群は10数mを測る規模の墳丘をもち、箱式石棺や木棺の埋葬施設を有するが、調査例が少なく、その様相は明らかでない。後期古墳は平野全域で分布が認められ、数の上でも圧倒的に多く、被葬者層の拡大を窺わせる。墳形では前方後円墳、円墳、方墳が知られている。前方後円墳、方墳は僅かで、円墳が大部分を占め、前方後方墳や方墳の多く分布する松江市を中心とする東部出雲とは対照的である。規模では大急守古墳の全長100m近くの前方後円墳が最大で、大部分の古墳は径10~20mの墳丘を有する。内部主体は横穴式石室が殆んどを占め、使用される石材には切石と自然石および割石があり、その架構方法も時期や地域により大きく異っている。また、内部に石棺や石床を有するものも認められる。副葬品をみると、小規模な古墳は少量の武器と土器を有し、大型のものは金銅製の馬具や装身具をもつ。これらの古墳は、平野全域に一様に分布するのではなく、地域的にまとまりが認められ、神戸川下流域、伝経山周辺、北山南麓の3地域に分けられる。

神戸川下流域 出雲市今市町、出雲市上塙治町、出雲市馬木町、出雲市古志町一帯で、律令時代に神門郡家、狹結隊、神門軍團等が置かれた要衝の地であり、その前代といえる古墳時代後期にも大規模な石室をもつ古墳が多く築かれ、出雲地方の古墳文化の中心地としての役割を果たしていたのである。神戸川右岸には大念寺古墳、塚山古墳、上塙治柴山古墳、地蔵山古墳、半分古墳、光明寺古墳群が、左岸には刈山古墳群、放れ山古墳、大桜古墳、妙蓮寺山古墳、宝塚古墳が存在する。これら古墳の詳細については後述する。

伝経山周辺 総合郡斐川町の阿宮、山西、神庭の三地区に小規模な石室をもつ古墳が集中している。現在知られているものとしては、高野古墳群、布子谷古墳、山西小丸古墳、栖雲寺山古墳、後谷古墳、結古墳、貴船古墳、武部西古墳が挙げられる。これらの古墳は絶て小規模で、石室が露出しているものもある。石室は玄室プランが狭長で、各壁および天井には1~数枚の切石を使用したものが多い。また、武部西古墳や布子谷古墳および高野古墳群には2段積みや、切組み積みも認められ、神戸川下流域の石室と類似するが、後谷古墳の割り抜きの玄室や出西小丸古墳の玄門とその閉塞石に残る陽刻の様に出雲東部の要素も混在している点が注目される。

北山南麓 出雲市東林木町から平田市国富町一帯で、旅伏山山麓を中心に小規模な古墳が多く分布している。特異なものとしては上島古墳（平田市国富町）がある。

径15mの円墳で、割り抜きの家形石棺と小型の竪穴式石室を併置し、副葬品としては五鉢鏡、馬具、玉類等が出土している。他は割石造りの小規模な横穴式石室をもつものが多いが、定岡谷古墳群（平田市国富町）のように20数基より成る古墳群も知られている。また、美談神社2号墳（平田市美談町）の様に各壁が切石の一枚

＊古志町に所在し、狹結隊
も隣接していた。

＊出雲郡にあたり、
郡名が残かれていた。

＊門状のもので、八束郡六
道町所在の伊賀見古墳、
下の塙古墳、猿古墳等
等で知られている。

* 套入構造で、四注式家型の玄室が多く、東部出雲の平入構造とは対照的である。

石から成るものも混じる。なお、数において後期を代表するのは、丘陵の山腹に穿たれた横穴である。その分布には疎密があり、神戸川下流域では一つの横穴群に数十の支群をもつ上塩治横穴群（32支群100穴以上）も知られているが、平野の縁辺部とりわけ北山山麓では小規模な群が点在するに過ぎない。

3. 神戸川下流域の横穴式石室

神戸川下流域は、出雲平野を統轄し、大きな政治力・経済力を振った首長が基盤とした地域で、両岸に横穴式石室を内蔵した大形古墳が出雲市今市地区や上塩治地区、吉志地区など、いくつかのグループ毎に繼起的に築造されている。

大念寺古墳は、全長100mにも及ぶ前方後円墳で2基の家形石棺を内蔵する大形の横穴式石室を有している。石室は全長12.8m、高さ3.3mと大きく、自然石と割石によって構築された複室構造のもので、平面形は庭長方形プランを呈している。この墳に築造されたものとしては、妙蓮寺山古墳（全長49m・前方後円墳）、半分古墳（全長約40m・前方後円墳）があり、共に家形石棺を内蔵する自然石と割石で造られた横穴式石室を有している。

このうち、大念寺古墳は、墳丘・石室の規模や僅かに知られる金銅装大刀・履・各種馬具などの副葬品からみても、出雲平野を傘下においた首長の墓と考えられるもので、横穴式石室の側壁や帽石の架構にみられる石積みの手法や平面形が整った複室構造をとっていること、巨大な刺抜き式の横口式家形石棺など、当初より完成された技術を移し、様々な要素を加えながら築造されたものであることが窺われる。注(8) これは、妙蓮寺山古墳がその平面形において複室を指向しながらも、石室構造としては完成されていないことや、左右両側壁の石積みが不均等であることなど、石室形態に不安定な様相が窺えるとの対照的である。また、石室の立面形も、大念寺古墳では帽石の直上に天井石がのる構造をとっている点で大きく異なっており、この時期の横穴式石室は定型化が進んでいなかったことが窺われる。

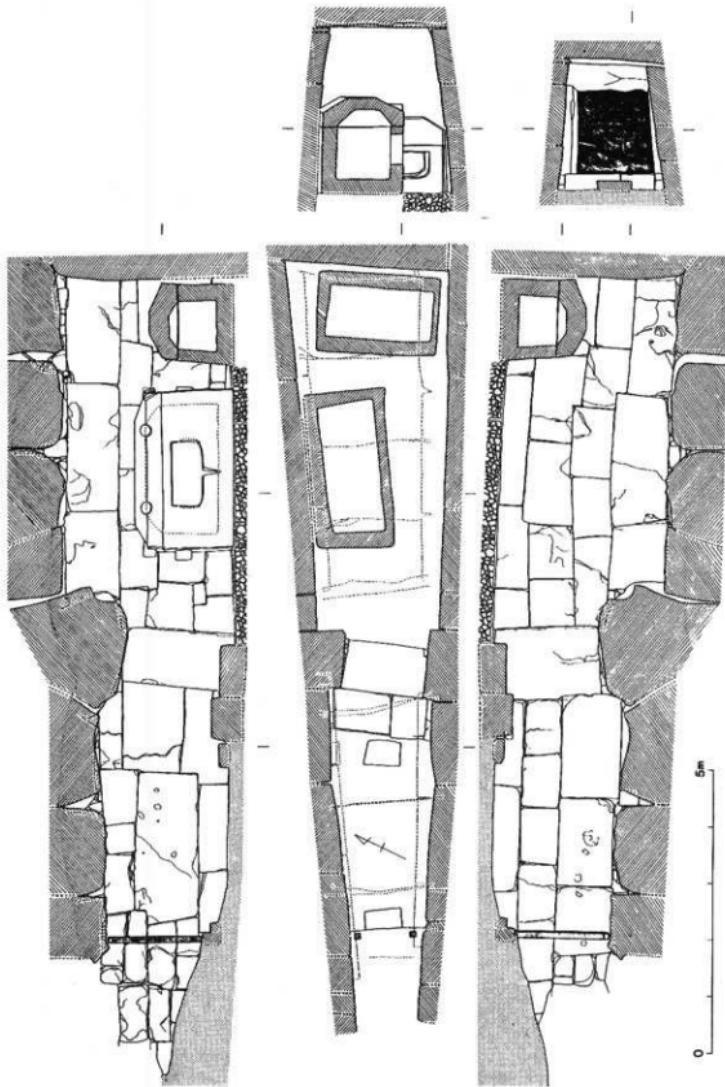
これらに統くと考えられるのは、上塩治築山古墳で径40mの円墳の内部に家形石棺を内蔵した全長14.6m、高さ2.9mを測る大形横穴式石室を有しており、金銅製冠や円頭大刀・各種馬具などが出土している。石室は各壁に切石を使用し、奥壁は一枚石、側壁は切組み積みの手法を用いて、天井石・帽石には自然石を架構している。この段階に神戸川下流域の横穴式石室は地域的な特色を示すようになり、塚山古墳、放れ山古墳（径13m・円墳）・刈山4号墳（径13m・円墳）など同種の形態をとるものが各地域で築かれ、石材が大型化し、やや新しい様相を示す宝塚古墳・刈山5号墳（径14.5m・円墳）も知られる。また、この時期には、周辺地域の石室にも平田市山根垣古墳や斐川町出西小丸古墳など、切組み積みの手法をとるものがあられ、神戸川下流域の石室の影響が及んだものと思われる。

当地域の横穴式石室は、大念寺古墳に代表される自然石・割石造りのものから、上塩治築山古墳にみられる切組み積みの手法を駆使した石室へという流れを示して

*現在では横穴式石室を見ることはできないが、ウイリアム・ガウランドによる記録がある。

William Gowland
「The Dolmens and Barial Mounds in Japan」 (1897)

図 6 土地岩山古墳石室断面図（左側・上部治地室を中心とする短廻式石室断面）から複製





注39
いる。地蔵山古墳は、石室の規模や内部施設よりみて、これに統くと考えられるものであるが、大念寺古墳以来の石室構造の変遷よりすれば、異なる石室の系譜を有するものである。石室は全長8mを測る複室構造をとるが、玄室は前代のものに比較して著しく正方形に近い平面形を呈し、各壁を一枚石で構成する手法や割り抜き玄門を採用している。これは、出雲東部で同時期に盛行していた石棺式石室の要素の一部であり、出雲西部の横穴式石室に東部の影響が及んだものとして注目されよう。しかし、玄室の平面形が横長ではなく、極長方形であることや、石材の組み合せ、天井石が家形に加工されないことなど、東部のものと異なる点も多い。^{注40} 同種の石室としては、大桜古墳、小坂古墳（径15m・墳形不明）、光明寺2号墳、平田市美談神社2号墳（^{注41} 径13m・方墳）、斐川町柄脛寺山古墳があるが、各壁を一枚石で構成する手法は認められるものの、割り抜き衣門や閉塞用の割り込みは一般化しておらず、また床石が複数の切石より構成されるなどの相違点がある。

割り抜き玄門や各壁を一枚石とする手法は、出雲東部の石棺式石室の強い影響下に採用され、当地域の石室構造を一変させたが、石棺式石室を忠実に写したものではなくみることができず、古墳の繼起的な癡造も途絶しなかった点からみると、神戸川下流域の勢力が、出雲東部の影響下に入りながらも、なお力を保持していたことが窺える。

以上のように、出雲平野の後期古墳は、斐伊川、神戸川の下流域に地域的まとまりをもって分布しており、特に、神戸川下流域は、規模・内容においても他地域よりもかなり卓越している。さらに、大念寺古墳から地蔵山古墳に至る巨石墳の系列（すなわち首長墓系譜）が認められ、また、それを支えた左岸および仏經山周辺地域の古墳群も相当の規模を有し、かつ、同様に各時期ごとに継起的に営まれている。これにより、6世紀から7世紀にかけて、神戸川下流域を中心に支配秩序が成立し展開したことが窺える。

■九州の横口式家形石棺を
横形に出雲東部で独自の
発展を遂げたもので、切
石の一枚石で極長方形
プランの玄室をつくり、
割り抜き玄門や家形の天
井石をもつことを特色と
する。

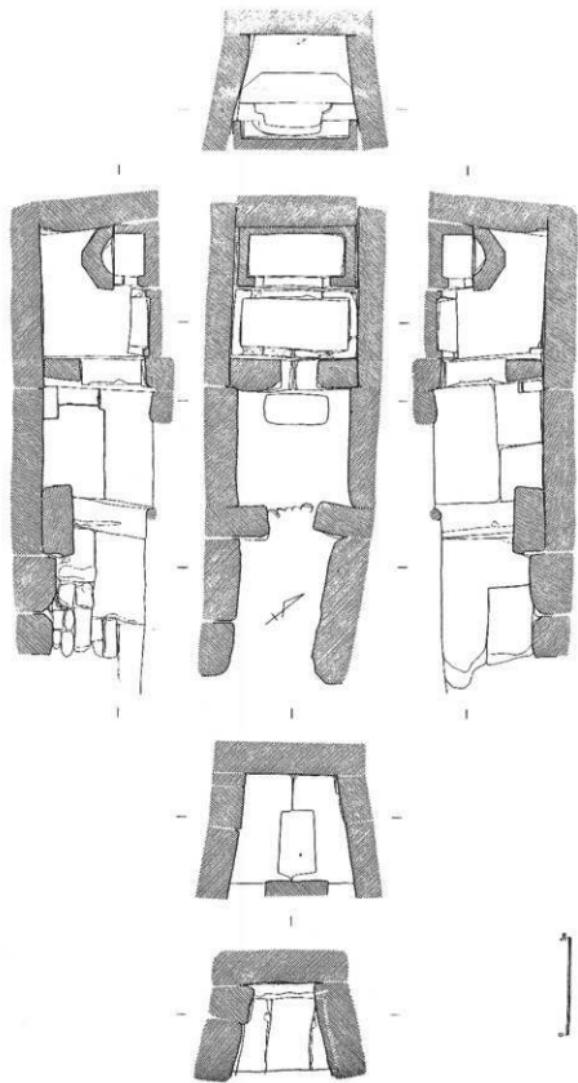


図7 地藏山古墳石室実測図
(「古式石室の研究」からの転載)

放れ山古墳 横穴式石室



その契機となったのが、大念寺古墳の築造である。この古墳の墳丘・石室の規模、技法および副葬品の内容は、その前後の古墳をはるかに凌駕しており、その背景には、平野の大規模な開発や治水事業等の経済的基盤の確立があったことが想定される。そして、この勢力の消長は、東部出雲とりわけ意宇平野周辺部の古墳文化の拡大と相俟っており、古代出雲の政治的動向を知る上で重要な手懸りとなろう。

注

- (1) 島根県教育委員会『出雲・上埴生地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』(1980)
- (2) 山本清『古墳』(『出雲市誌』 1951)
- (3) 出雲市教育委員会『山地古墳発掘調査報告書』(1985)
- (4) 遠田潤雄「簸川平野東南部の古代村落と古墳」(『斐川町史』 1968)
- (5) 注(1)に同じ
- (6) 出雲考古学研究会「石棺式石室の研究」(『古代の出雲を考える』6 1987)
- (7) 遠田潤雄「上島古墳調査報告」(『古代学研究』10 1954)
- (8) 島根県教育委員会『妙蓮寺山古墳調査報告』(1964)
- (9) 注(1)、(2)に同じ
- (10) 注(6)に同じ
- (11) 山本清『大魔古墳調査報告』(1965)
- (12) 西 陵「美鎌神社2号墳の意義について」(『たてぬい』27 1985)

2.1 経緯

古墳の発見

今市大念寺古墳は、文政9年（1826）に発見された。明治18年頃の記録、今市村「皇國地誌」には、「古跡 大念寺穴 大念寺境内に接する山林に在り 是は文政九年三月大念寺本堂再建の時寺地の地形を爲さんと土を掘取し際發見せしものにして……（略）」と記されている。境内南側の山林（古墳）を切り崩していたとき、石室の奥壁の一部が露出したものと考えられる。同地誌は「古老の口碑も傳わらざれば其古跡の何たるを知る者なしと最も恐らくは古時の陵墓ならんか……」と、異様な墳墓であることを述べている。

国の指定

大正13年12月9日、當時隣村の上塩治篠山古墳、同地藏山古墳とともに指定された。

墳丘の破損

① 出雲市は昭和20年前後に集中豪雨による水害が発生しているが、大念寺古墳の墳丘北側は急斜面となっているため崩壊しやすく、昭和16年、同20年の豪雨の際、地すべりが起きている。その都度修理が行なわれた。

② 次は、昭和36年の水害による修理工事が行なわれて間もない同39年の集中豪雨によって後円部北側斜面が再度崩壊し、石室（奥室）の一部が露出した。修理工事は、コンクリートで擁壁を立て、斜面は法枠の中に栗石を敷き、コンクリート打ちによって補強された。その上部の石室部分は盛土で覆い、芝を張り仕上げられた。

羨道部の破損

羨道部入口の両側壁の一部は積み替えられているがその時期はわからない。（一説では明治末期とか）。昭和55年10月大念寺住職からの連絡で、羨道部右側壁の径約40cmの割石を含む数個が自然に落下したことを知り、直ちに島根県教育委員会に通報するとともに文化庁へは「き損報告書」を出した。

保存修理事業（第1次）

羨道部全体の崩壊につながる恐れがあるため、昭和56年6月、10月に文化庁調査官の視察を受け、国庫補助事業として修理することになった。修理事業は3カ年の継続事業として実施することになった。

修理に伴う調査

① 羨道部側壁の変形及び天井石が移動した原因を知り、修理工事設計上の資料とする目的の発掘調査を、昭和57年3月、同年11～12月に行った。その結果、羨道部附近の墳丘断面の観察ができ、墳丘盛土は、数十層に整然と版築状に積み重ねていることが明らかになった。

② 羨道部石組の解体に伴う調査は、翌58年2～3月に行った。このとき天井石上部の、固く叩き締められた粘質土の上に径2～3cmの大河原石が石室をとり巻く

ように敷かれていたこと、前庭部も入念に版築されていること、建物跡と思われるピットの検出など、新事実が明らかになった。

③ 昭和58年度の調査は、次年度以降の古墳整備のための基礎資料を得るために、地形測量、ポーリングによる地質調査、ならびに前方部北側断面の土層観察、同南側平坦面のトレンチ調査を行った。また、石室内に排水施設を設けるため、石室床面の調査を行った。発掘面積は最少限度に留めたが、墳丘および墳域の規模は、從来の説以上の大さとなり、また石室（前室）内の小石棺の存在などが明らかになった。

④ 墳丘を構成する人為的盛土の各層の性質について、科学的な分析検討を島根大学三浦清教授に依頼した。茨道部上部と左右の墳丘断面を、奈良国立文化財研究所の指導のもとに合成樹脂で固め、薄くはぎ取り（土層転写法）貴重な資料を得た。

一般市民に周知する現地説明会は、9月18日に開催した。

修理工事

① 茨道部石組みの解体修理工事は、設計仕様に手間取り昭和58年2～3月に行なった。このとき補完の石材は、市内朝山町姫山の東側の採石場から求めた。

② 石室上部の盛土工事は翌年1～3月に行い、同時に石室（前室）床下に浸透式排水管を埋設した。かくして（第1期）修理事業が完了し、「修理工事報告書」を発刊することができた。

第2次保存修理事業

出雲市教育委員会は、今市大念寺古墳が歴史上きわめて価値の高い記念物である

石室奥壁付近崩壊状況
(昭和59年暮れ災害時)



ことを改めて認識し、続いて墳丘全体の修理を計画した。それは後円部北側の盛土が流失し、玄室奥壁の角から光が差し込む状態であり、雨水が浸透し石室の崩壊につながる恐れがあること。その他、墳丘各所が損傷しているからである。

昭和59年8月には、大念寺古墳保存修理計画策定委員会を発足させ、検討を経たのち、昭和59年度から昭和62年度までの4カ年で、第2次保存修理事業を実施した。事業内容は、墳丘北側の擁壁・法棒工事と、墳丘南側の盛土工事が主体であり、それに伴う調査も行った。

2.2 石室等修理事業の概要

①昭和56・57年度の調査

昭和56・57年度の調査は、石室修理工事で墳丘を取り除く漢道部の上方及び石室入口付近の2ヶ所について、昭和57年3月と昭和57年11月～12月に実施した。その結果、大念寺古墳の墳丘は土壤改良した土を相互に盛土するなどかなり高度の技術によって築造されていることが明らかになった。さらに石室入口の前方から1間×2間の建物跡、漢門部から框石をそれぞれ検出した。

1) 石室入口付近の土層

石室入口付近の地山は、石室床面下に存在している茶褐色を呈した粘質土で、入口の右側が高く、左側に向かって緩やかに下がっている。漢道部側壁の根石は、この地山を掘り込んだ溝状の窪みのうえに据えられていた。盛土は、石室を直接保護している第1次墳丘と、その上部に墳形を整えるための第2次墳丘の2つに大きく分けられる。第1次墳丘は石室側壁の石を積み上げることに盛土されたものと考えられ堅く締まっている。地山から50cmあまりまでは黒灰色の粘土が混入している粘質土で、上方には碎石を含んだ褐色と灰褐色の粘質土が相互に石室を中心として、ハの字形に盛土されていた。天井石の上部には葉状の植物繊維を含んだ黄褐色のきめの細かい粘質土と灰褐色粘質土があり、その上は径2～3cmの大河原石を幅6mに

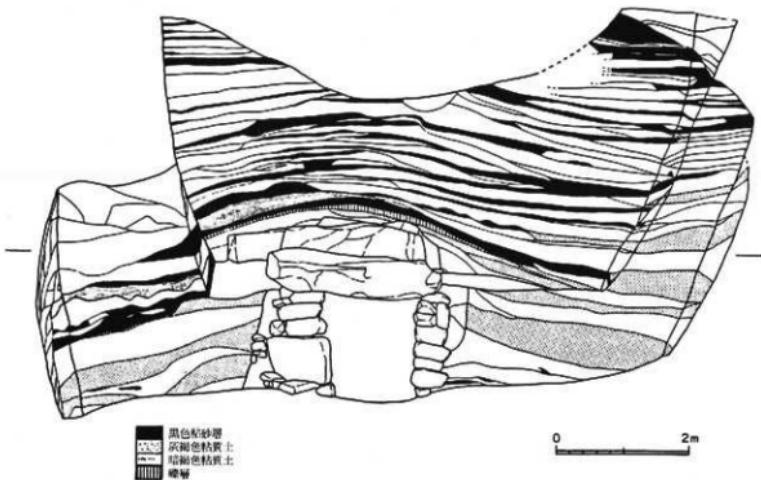


図8 墳丘土層図

わたって2、3重に敷き、さらに、石室を取り囲むように堅く締まった黒色の粘砂層を覆って第1次墳丘の築造が完了している。このように天井石上部の土層は、極めて丁寧に築造しており、特に葉状の植物繊維を含んだ土層や、礫層の存在は注目される。

墳丘を形成するための第2次墳丘は、3段にわたって盛られていた。1、2段の盛土は緩やかな円弧状に黒色粘砂層と褐色粘土が互層に盛られ、3段目の土層は、ほぼ水平で、墳丘表面近くは、黒色粘砂層が厚く盛られていた。墳丘の斜面は、盛土の後に約30度の角度で削り取って墳丘を整えている。なお、1、2段目の上面には、径2~3cm大的の河原石を敷いており、3段目の盛土は、後後に削られてほとんど残っていない。

2) 建物跡

この建物跡は1間×2間(1.5m×1.2m)の壇立柱の建物で、ちょうど石室入口の前方から検出した。柱穴は狭道部側壁延長上に60cmの間隔で3穴からなる柱列が、1.5mの幅をもって並行して2列存在していた。柱穴は径15cm前後、深さ10cm~30cm。この建物跡の性格については、今後検討が必要である。

3) 桁石

この桁石は前室入口の左右に存在する柱石の間にはめ込まれたもので2枚からなる。奥の石は凝灰岩質で、前方の正面および左端部それに上面は切って加工している。前の石は、フジシ石といわれる軟い石からなり、この石の上面には、前側が1段低くなるような形の切り込みがある。このことから、この部分に切石の間塞石が存在していたと思われる。

②昭和58年度の調査

昭和58年度の調査は、大念寺古墳整備のための基本資料を得ることをその目的としていたが、具体的には次のねらいによるものであった。

- (a) 墳丘の整備に備えて、封土と地山の状況を築造技法の面から把握すること。
- (b) 採土や崖の崩壊等のため、築造当初の墳形やその規模が的確に把握し難い現状であるので、調査によって図上復原のための資料を得ること。
- (c) 石室内に排水施設を設ける必要があるので、それに備えて床面の調査を実施し、その様相を明らかにすること。

今回の調査は、このようなねらいを達成するためのものであったから、遺跡の保存を考慮して発掘面積は最小限度に留めることとし、採土の際に取り残されていた前方部先端北半崖面の土層の固化に主力を注いだ。しかし、この地点の調査だけでは墳丘および墓域の様相を明らかにできなかったので、前方部南側の墳丘に接した平坦面に11m×2mのトレーニングを設定し、南北両面からの調査を試みた。

一方、石室内においては、玄室内に安置されている家形石棺の西端から前室の入口までの間に、石室の主軸に沿った幅50cmのトレーニングを設定して床面の様相を明らかにすることとした。石室内の排水施設はこの地点に設置する予定だったので、

この地点の床の実態をえる必端があったからである。

(1) 前方部先端北半崖面の調査

前方部北側の採土取り残し部分の崖面に、互層をなす人爲層があることは以前から知られていた。この崖は、位置的にみると大念寺古墳の前方部先端の一部に当たる可能性が強いことから、ここを明らかにすれば、既に失われている前方部北側の様相の一端をえることができるとして調査するととした。崖面を掃除して土層を詳細に観察してみると、その上部は二次的な削痕を留めてはいるものの、幸いにもその下部の大部分は原形を留めていて、図8に示すように互層をなす人爲層の様相が的確に把えられることが判明した。図8から知ることのできる大念寺古墳の築造工程は、概略次のとおりである。

第1段階の工程 崖面の土層の在り方からみると、大念寺古墳は、野津左馬之助氏以来今日まで一般的に考えられていたような丘陵上に築造された古墳ではなく、やせた馬背状の低丘陵を芯として平地に築造された古墳であるということができる。大念寺古墳はこのような古墳であるから、その築造は先ず自然丘陵を人爲的に他の土で包み固めることから始められた。その第1段階は、上に広範囲の平坦面を形成するためやせた丘陵を貼土で太らせることであった。作業は丘陵麓の内湾する自然斜面を貼土によって外反りの斜面に造り変えることから始められたが、それは3工程の順序によって行われた。おそらく、地山層と人爲層との間に生ずる剥離現象を防ぐことを意図したことであったものと思われる。先ず、丘陵麓の凹部に土を貼り詰めて斜面の直線化を図り、その上に地山面には平行に厚さ10cm前後の層を突き固めながら幾層も重ねて斜面の内湾を外反りに変え(第I次工程)、その上に更に同様の手法で数層を重ねて(第II次工程)外反りの斜面をほぼ完成させている。

これまでの段階は、上に墳丘を築造し易くするためのいわば地山の加工修正作業とでもいうべきものであるが、それだけに各土層共非常に固く締められており、色調はそのほとんどが薄黒灰色を呈している。この地点での土壤分析の結果は未だ明らかではないが、後円部の石室周辺における黒灰色土層は灰を混入した自然の山土を海水でぬりながら締め固めていることが島根大学教育学部教授三浦清氏の分析によって判明しており、おそらくこの異常に固い第1段階工程の土層も同様の手法によって固められているのではないかと推測される。さらに注意されることは、第I次工程においても第II次工程においても、人爲土層の最下端部は地山の凹部でそれに接していく、決して地山の凸部や平坦部でそれと接してはいない事実である。このことは、あるいは貼土層の滑落を地山の凹部で止めようとする意図によるものなのかも知れない。いずれにしても、地山の加工修正作業において、地山層と人爲層との剥離現象や人爲層の滑落現象を防ぐための様々な工夫がこらされている事実を見逃すわけにはいかない。

ところが、以上のような基礎工事のみでは地山層と人爲層との上部の接合部分附近がなお内湾の傾向を呈するところから、P点附近をその基として、第II次工程の

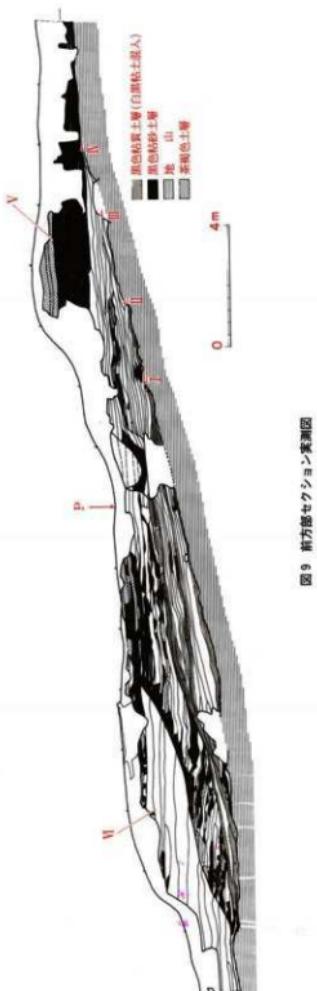
土層の上に同様の手法による人為層をさらに数層積み重ねている。第III次工程である。この土層も基本的には薄黒灰色を呈する堅固なものであり、この工程の完成によって地山の加工修正作業は完全に終了したことになる。

第2段階の工程 やせた地山に貼土することによって地山を補強する基礎工事を第1段階の工程とすれば、その上に更に盛土することによって墳丘を載せるための平坦面を形成する工事は第2段階の工程ということになる。この調査地点での工程細分の順序でいえば、第IV次工程に当たるのがそれである。

この工程では、第1段階の工程によって完成した芯の部分の上に更に土層を加えて上部に平坦面を形成することになるが、それだけに土層の積み方は下部の工程とは異なって水平層の積み上げを基調としている。各土層の厚さは、下部のものよりはやや厚く、15cm～20cm程度である。色調は黄褐色・赤褐色・黒灰色・黒色等様々だが、黄褐色や赤褐色の土層は比較的軟質であり、黒灰色の土層は固い。墳丘の石室附近でもみられたように、透水層と不透水層とが互層をなし、このことによる水分の調節によって盛土の強度を保つように企画されたものと思われる。さらに一部には砂礫層も認められて、積極的な水分調節の意図を物語っている。

上層部は二次的に荒らされているのでその詳細は明らかではないが、墳丘部の下端面を北に延長した線と第IV次工程による最北部斜面を上に延長した線とはP点の上部附近で交わるので、工事によって形成された上部平坦面の北限はこの附近とみることができよう。なお、この工程で形成された最北端の斜面は土の削切によってあざやかに整形されている。

第3段階の工程 第2段階までの工程で形造られた人工的土台の上に、墳丘や外庭部を構築して古墳全体を完成させる作業が第3段階の工程である。この地点の調査では、墳丘と外庭部との存在を明らかにすることはできたが、その構築順序については上面の荒廃のために確認することができなかった。しかし、一応の常識的順序として、ここでは墳丘の築造を第V次工程とし、外庭部の構築を第VI工程とする。



第四回 墳丘ハヨシノクモガタの断面図

図9の右側奥部の上面5か所に黒色の土層がみえているのが墳丘の残存部と考えられるものである。この地点は現状では竹林になっていた所に竹が繁茂しているため、崖面ではその根によって墳丘の土層が切れ切れになっているが、今少し東側まで削れば連続した残存部の存在する可能性が強い。だが、いずれにしてもこの部分は前方部前面の斜面の一部であり、土層は東側に向かって急な下り勾配になっている。おそらく、この残存部の東側に南北に横たわる丘陵鞍部が前方部東端の墳壠であろう。残存土層には砂礫を含むものや細粒の砂層のもの等があり、それらが互層をなしてはいるものの、全般的に黒色味が強く、墳丘端部の様相を強く呈している。また円礫の並ぶ層もみられるが、これはおそらく前面の段とかかわりのあるものであろう。前方部の北端を示す土層は確認できないが、第IV次工程による平坦面の北端部、つまりP点の上部附近であろうと考えられる。前方部前面の墳壠線が判然としないので、古墳の方向を正確に決定することは困難な現状であるが、将来は前方部前面の鞍部の調査によって明らかになるものと思われる。

第VI次工程は外底部の構築である。第IV次工程によって形成された基礎壇の北側に水平層を積み上げて構築されたものであるが、各土層は比較的厚く、20cm~40cmを測り、全体的に締まりは弱い。色調は黄褐色・赤褐色・黒灰色等様々で、黒灰色土層が固みが強いことは他の工程の場所と同様である。上部には砂利の混入層も認められ、この工程でもやはり適正な水分の保持が意識されていたように思われる。ここも二次的な荒廃がかなりひどく、上面の様相やその高さ、および北端の位置等は明らかではない。

(2) 前方部南側トレンチの調査

一方、前方部の南側では、そこの平坦面に主軸に直交する11m×2mのトレンチを設定して調査を実施した。それは、前方部南側墳壠の確認と南側外底部の様相を明らかにすることを目的とするものであった。調査の結果、墳壠にはほとんど乱れが認められず、若干の土の流溝はあるにもせよ、現状の前方部南側の墳壠線は基本的にはほぼ原形を保っているものと判断された。

トレンチを設定した地点においては、地山はやや上り勾配で墳丘下に続いているが、その南側での地山の在り方は、次第に勾配を急にしながら下降している。そして、その下り勾配の地山上には厚さ10cm~20cmの土層の積み重ねによる外底部の形成がみられる。この地点での地山は、墳壠から約1m南までは緩傾斜を呈するが、そこから勾配を急にして下降している。土層の積み重ねは、この勾配変換点から南側へ約8.5mの間、地山の緩傾斜を延長する角度で続く。この平坦面上には円礫や円筒埴輪片や土師器片が多数散乱していて、ここが外底部の上面であったことを示している。

この平坦面の南端から南側は土層が盛り上がるよう積まれており、ここでは円礫等の散布が全く認められないこと等を併せ考えると、平坦面の南側には土手様のものが構築されていたものと思われる。その上面は、現状では完全に削平されてい

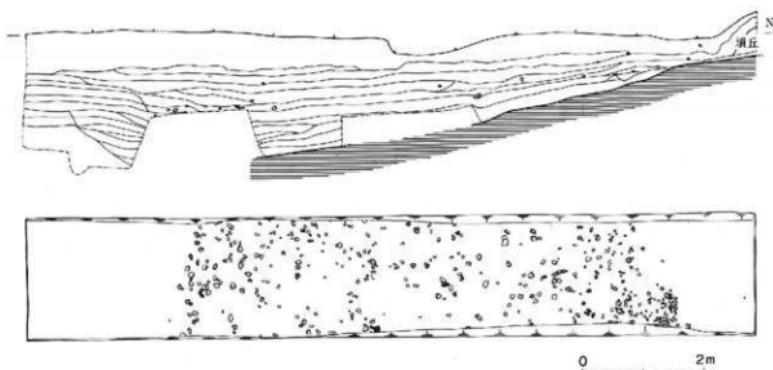


図10 前方部トレンチ実測図

るので、当初の土手の高さを知ることはできない。前方部の周辺が低い平坦面であるのに対し、後内部の周辺はそれより約1.5m高いテラス状を呈している。両者の境界線はくびれ部附近から主軸に直交して南側へ延びている直線状の崖であるが、周辺の地勢等から考えると、この崖は当初から存在していたものと推測される。一方、前方部の東側に隣接する『武志山莊』の庭には、南北に細長い異形の築山がある。この築山は山莊以前から存在していたといわれているが、その高さは後内部周辺のテラスの高さとはほぼ等しい。また、この築山を北に延長した位置にある人家裏の崖には人爲的な盛土層が認められる。これらのことから、築山と北側の人家とを結ぶ辺りが墓域の東端に当たると考えられ、彼の築山は周堤帯の残存部ではなかろうかと思われる。仮にこのことが肯定されるならば、前方部南側平坦面の南側にみられる土手様の構築物も周堤帯の残存部と考えられ、前方部の周りにはテラスと同高的周堤帯に囲まれた同溝が存在していたとの想定に導かれるのである。

大金寺古墳は、これまで丘陵上に築かれた全長約84m・高さ約6mの前方後円墳だとされてきた。しかし、今回の調査で、墳丘の全長は100mに近く、また墓域の長さは140m以上、築かれた墓域全体の高さは約15mにも及ぶ壮大な古墳であることが明らかになったのである。

(3) 石室内の調査

石室内では、玄室の石棺西端以西と前室と床面を幅50cmのトレンチを中心に調査したが、これによって判明した事実は次のとおりである。

- ・ 前室にも玄室にも、大小の円礫がぎっしりと敷き詰められていた。
- ・ 玄室の石棺の下には敷石は認められず、礫は石棺の安置後に敷き詰められている。
- ・ 玄室内で石屑は全く認められず、石棺は他の場所で作られ、制作後運び込まれ

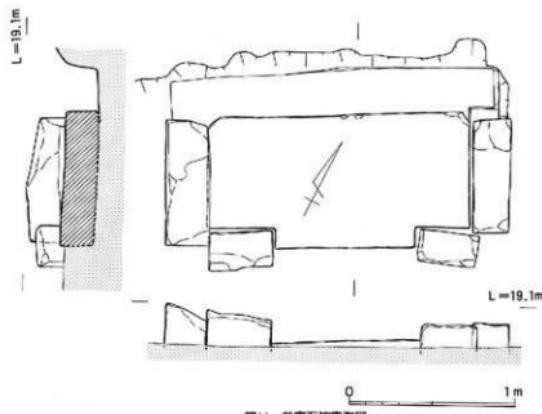


図11 前室石棺実測図

た。

- ・玄門の框石の存在が明らかになった。
- ・前室の北壁寄りに組合せ式家形石棺の存在が明らかになった。この石棺は、下端部を残して破壊されているが、破損石材の中に家形の屋根石の存在が確認されたので、家形石棺として差支えない。
- ・前室の石棺の残存部分は左右の側壁と前壁の下端部及び床石で、奥壁の位置には明瞭な抜型を留めている。その規模は、外測で $2.08m \times 1.16m$ である。
- ・この石棺は円礫を敷き詰めた後に安置されている。おそらく、石室の構築後に持ち込んだものであろう。

(4) 出土遺物

石室内遺物 鏡片（小片であるために外区の鋸齒文以外は不明である。前室の副葬品と思われる。）・金銅製品残片・寛永通宝（6枚。地蔵尊を祀っていたためか？）

外部遺物 円筒埴輪小片多數・土師器片

(1) 工事

横穴式石室羨道部の破損に伴う修理事業は、昭和57年度・58年度の2カ年で、設計及び工事を行なった。

修理工事の概要是、調査結果を基に、現状の破損状況から羨道部の天井石で前面入口部分から3石分、約3mをその工事範囲として、天井石の解体、変形している羨道部両側壁の解体を行い、石室側壁の積みなおし、天井石設置及び上部盛土工事が主たる工事内容である。また、石室石積みの安定のための床の締固め（タタキシックイ）及び、上部盛土に張芝を施した。説明板や入口の管理用ドアを敷設して昭和59年3月に完了した。

しかし、この工事に至るまでは、修理方針や工事方法について設計時、いくつかの問題が挙げられていた。工事の設計書の策定時、どのような方法で修理するか、それを得るために同時にどのような方法で造られているか、また、それらの結果をどのように設計、工事に反映させるなどの問題があった。

この当時、横穴式石室の解体修理に伴う例は少なく、墳丘の構造や構築方法の解明が必ずしも進んでいたとは言い難かった。横穴式石室を造るための石積の方法や構造、裏込盛土や墳丘盛土との関係など、ほとんど解明されていないような状態であったから、修理工事を行う上で調査結果の検討が重要な課題となつた。

大念寺古墳石室羨道部の発掘調査の結果、墳丘を形造る版築状互層盛土や、石室を取り巻く固く締めた粘性土などが検出され、墳丘を造る材料の多さもさることながら、土を締める工法の精巧さに驚かされた。調査の断面を見た時に、なぜそれほどまでにしなければならないかが、正直な疑問であった。また、1300年以上前に造られた構造物が、今なお安定、維持していることが驚異に思われた。

墳丘を造る上で、いくつかの工程と工法が考えられた。墳丘は、石室と、石室を直接保護する裏込盛土としての第1次墳丘、第1次墳丘の外側で墳丘を整える第2次墳丘に大別された。また第1次墳丘や第2次墳丘盛土内でも、個所や位置によっ

修理完了



て細かく材料や工法の違いが想定された。たとえば、第1次埴丘において、石室の側壁側の裏込盛土と、天井石上部の締固め層では異なり、第2次埴丘においては、埴丘内部の互層の締固めと埴丘の外側表面近くに盛られた非常に密な黒色粘砂層では、明らかに工法的にも、採用する材料においても、異なっていた。それらの各材料の土質試験によっても、土の採取場所や工法的な違いは明らかとなった。

以上の結果を踏まえ、修理工事においてその方針や施工方法の問題が討議された。修理方針は、石室の開口によって一部破損は見受けられても安定・維持している埴丘盛土や石積の現状から、当時の工法を踏襲することで一致した。しかし、工法において現在の施工精度が追いつかずとの問題があった。海水(にがり)や灰を使った締固め方法や、石を細かく砕いて粘性土に混入し固く締固める方法などである。また、石積においても、現在ではほとんど使われていない礎石や込石によって石積自体の強度を増す積み方と考えられ、個々の石の性質と石組全体のバランスによって成り立つ工法である。逆に構造的に第1次埴丘は石室石積と一体の構造体であり、石組が安定するため盛土方法と考えられるため、石積との工程上の関係などより重要な設計課題となった。

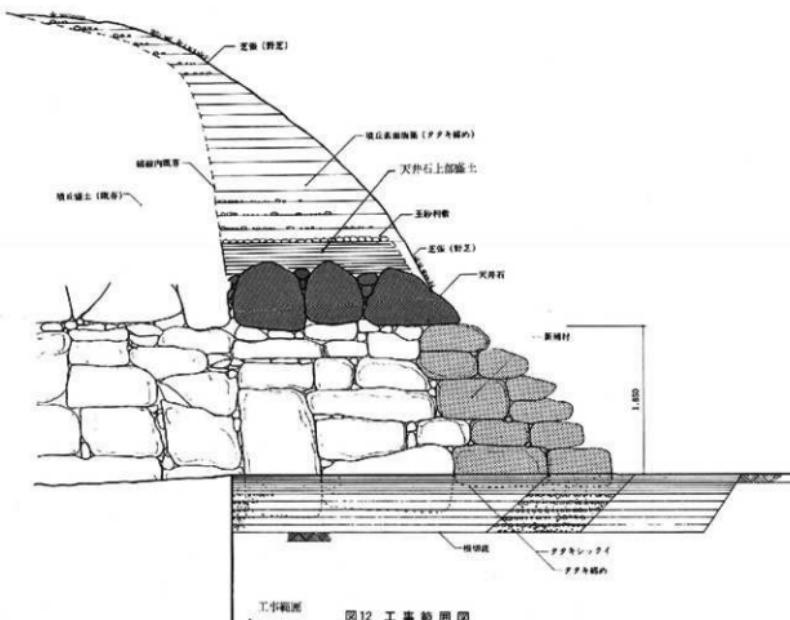


図12 工事範囲図

しかし、工事においての最大の問題は、それらの良質の材料がどこで得られるかという問題があった。当古墳の近くにあったとされる粘性土や黒灰褐色土の火山灰土など現在ほとんど周辺には見当らず、まして同質の土を搜すのは困難であった。また石室に使われた玄武岩質の石材など、補充材として材料を確保することにたいへんな時間を要した。

これらの問題を残したまま、修理工事に着手したわけであるが、石室の積み方については、出来るだけ当時の形態にあわせた工法で、裏込盛土や埴丘盛土についても当時の工法である版築状の互層構造で構築し、材料については良質の材料土を探し出し、石灰や砕石をまぜることによって、締固精度を高くすることに期待した。

これらの修理工事の過程の中で考えると、いまだいくつかの問題があることが窺える。それは、1) 工法上の問題と工事期間、2) 遺構面と新しく施す盛土の関係、3) 材料の採取等などである。

1)については、今回のような修理工事について、遺構がどのような工程や材料の選択について行われているかを拡大、検討することが必要であり、また施工期間についても、当時の工程やそれに費される時間など想定することによって構築物としていかに安定を図ったかなど検討することが必要である。2)については、盛土境界において、1300年も経年変化を持ったものと新しく盛るものでは、どうしても一体性が難しく、完成後の雨水による浸水や水路となる危険性が高く、今後の検討課題である。また、3)については、当時、埴丘を造ること自体がその材料を選んで、適した材料を使っていることと考えられ、それらの材料が現在得られない場合、材料や工法の選択にどのような影響を与えるかなど施工的な問題である。以上、前回の修理工事にあたっての問題であり、今後は個々の状況に応じた検討が必要と考えられる。

天井石設置状況





卷之二



說明板



說明板

第3章 事業計画

3.1 目的及び計画方針

大念寺古墳の墳丘は、墳丘主軸に沿った北側の約半分が割落・消失し、非常に不安定な状態を示している。大念寺本堂建物への封土崩落の危険性や古墳の主体部となる横穴式石室への影響など多分に予想される。比較的墳形を留める南側墳丘は、墓地に接し、一部封土の崩落や流失による破損個所が見受けられる。

北側墳丘の割落は、江戸時代の大念寺境内拡張にともなう土取りによるものと推測され、近年まで何回かの流失、補修を繰りかえしている。現在、大念寺本堂側に設けられている擁壁は昭和39年の大水害以後、国庫補助を受け施工されたものである。コンクリート擁壁の高さ、地上約2メートルの上に斜面にそって中腹までコンクリート板で法面を保護し、墳丘部にあたるところについては盛土を行い張芝を施工したと記録されている。しかし、墳丘部にあたる盛土部分は、現在ほとんど流失し横穴式石室の奥壁が露出している状態である。

南側墳丘については、全般的に墓地に接する墳裾部の崩落がはげしく、また前方部と後円部がつながる接合部分に大きく封土流失個所が見られる。それらの原因としては、墳裾部については土取りによる影響が考えられ、接合部などの流失個所については、長年の雨水等による浸食と考えられる。

これらの破損状況を含め、墳丘の封土流失防止や、横穴式石室玄室奥壁の崩落防止のための保存修理工事を目的とした事業を計画した。

計画にあたっては、現状地形と保存の方法、既存建物との関係、施工方法と遺構との問題など、墳丘遺構を破壊することなく工事を行うこと前提に、計画・検討を行った。主な問題点とそれに対する課題は次の通りである。

- 大念寺側境内と墳丘（後円部墳頂）とのレベル差が約12メートルもあり、急斜面をなしていること、また、寺本堂建物と既存擁壁との距離も狭いところで5メートルしかなく、工事工法と人家に影響を与えないような施工方法が検討される。
- 既存の擁壁や法面のコンクリート板について、新たに工事を行うことによる新旧の関係やそれらについての取扱い。
- 墳丘部分における石室保護、墳丘の盛土方法など、遺構とかかわるところについての施工方法と盛土仕様。
- 発掘調査の方法やその手順及び工事内容との関係について。
- 調査結果から墳形など予想される場合の施工形状への問題と、それらに対応する修理が検討されるか。
- また、墳丘や石室の保護・保存の問題として、どこまでを工事範囲とするか、など主たる内容である。

今回の大念寺古墳の事業については、早急に修理が必要とされる横穴式石室の崩落防止と墳丘封土の流土防止のための保存処置を重点項目として、また人家にもっとも影響を与えると考えられる後円部北側削落面と比較的残りがよい南側墳丘の封土流失防止のための工事を優先して行うこととした。計画としては、北側削落面は新たに擁壁を設け、法面が安定するような勾配に補修・盛土し、南側崩落箇所については、盛土による補充整形を行い墳丘封土の安定化を図ることとした。また、墳丘に施す盛土仕様については、墳丘の調査結果を踏え、当時の工法を可能な限り踏襲するような工法の選択を行い既存封土との一体化を図るものとした。

以上のことを見計画の方針として、本事業を保存修理事業として位置づけ、計画及び事業着手した。



墳丘北側削落面



墳丘南側
崩落部分（一部）

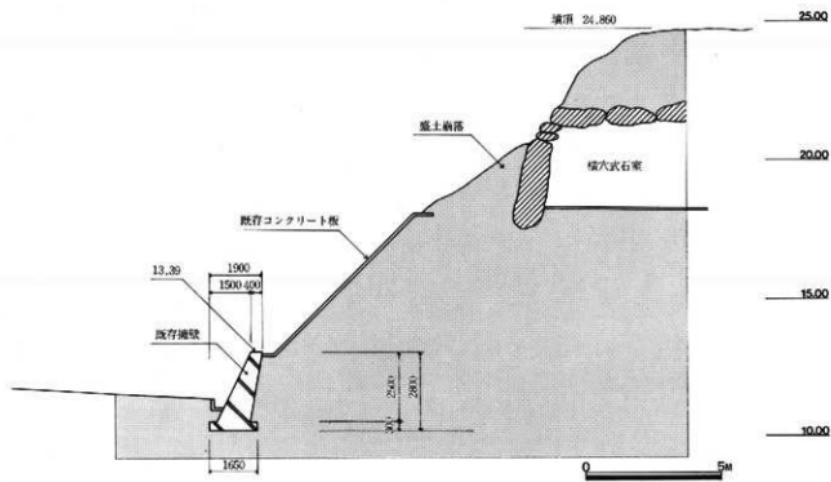
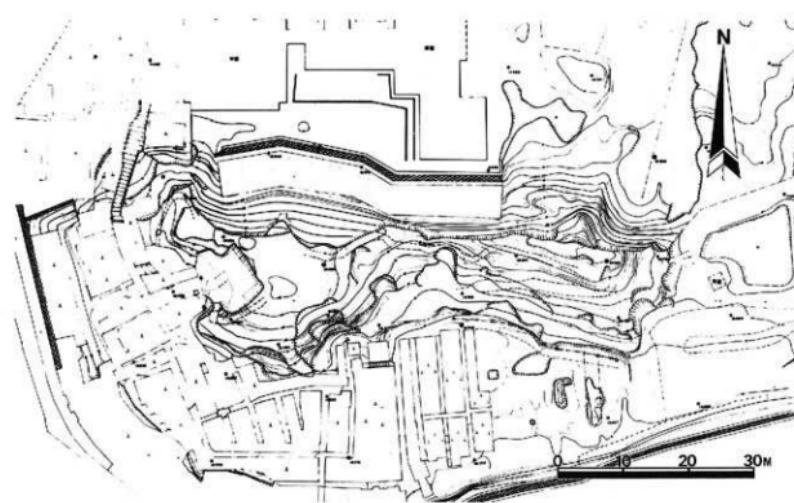


圖 14 北側墻丘斷面圖

3.2 事業内容

今市大念寺古墳の墳丘及び石室保護のための保存修理事業は、文化庁、島根県文化課の指導を受け、昭和59年度から4カ年計画で行うこととなった。

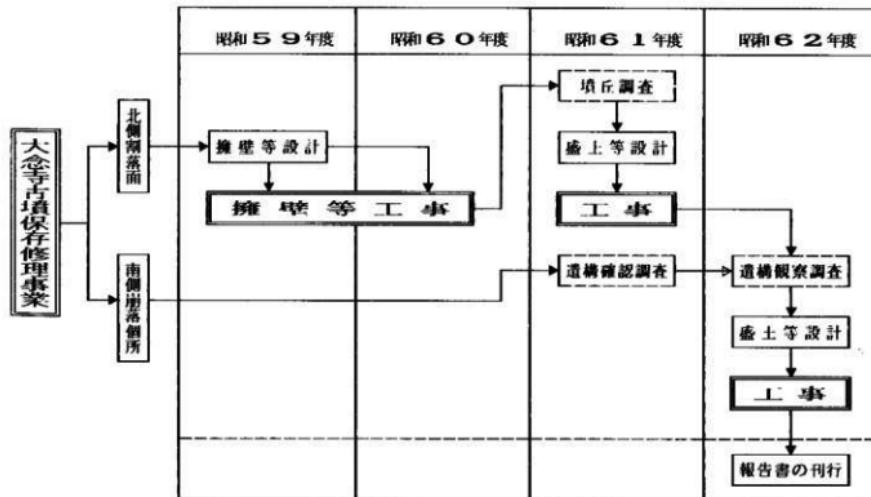
事業内容としては、保存修理工事に伴う遺構確認のための発掘調査、工事のための設計図書の作成及び工事監理及び施工、事業報告書の刊行を中心とする項目として検討、計画した。

発掘調査は遺構の残存状況及び位置関係を明らかにすることを目的に、工事にあたる範囲をその対象とした。また墳丘盛土工事に伴う仕様等、調査結果を基に検討することとし、原状墳丘の土質調査による分析など調査項目として加えた。

工事計画及び順序については、北側削落面を優先し、擁壁工事、墳丘盛土等工事を行い、北側墳丘の保存修理工事が完了した時点で南側削落個所の工事に着手することとした。設計監理は、調査結果及び現状遺構等配慮し、設計図の作成、工事仕様及び特記仕様書、工事見積書等を基本として工事の発注、工事監理、指導を行い、工事の円滑化を図った。

事業報告書は保存修理工事にあたっての調査及び工事経過をまとめ、得られた結果や内容を報告、刊行した。

【事業計画図】



●調査計画

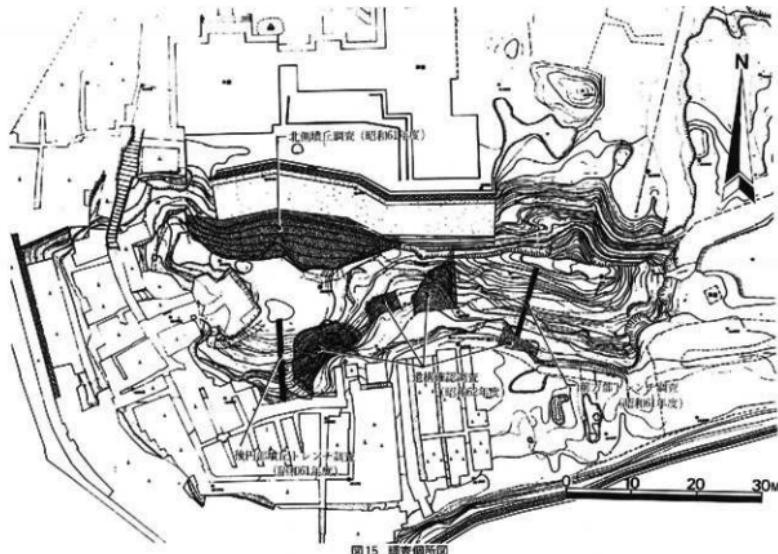
修理工事に伴う調査は、修理範囲にあたる北側墳丘削落面（後円部）及び南側崩落部分を対象とした。墳丘盛土等遺構の確認を目的として、修理工事のための遺構残存状況、表土と遺構面との関係など発掘調査によって検出、確認し、修理工事方法や仕様についての資料を得るための調査として計画した。

北側墳丘調査

現状のコンクリート擁壁等の法面工事は、昭和39年度以降に施工された修理工事によるもので石室奥壁が露出しているような状況は、その工事の盛土の崩落したのが原因と考えられ、同様に現在残っている表土も軟弱化しているものと思われた。

調査においては、軟弱化した盛土部分を除去することと、墳丘遺構面の位置及び残存状況を検出し、修理工事における工事範囲及び工事数量を正確に把握することが主たる目的となった。

また、墳丘封土上の遺構面の検出においては、前回の石室狭道部に伴う発掘調査において確認された横穴式石室とそれを包む裏込盛土の範囲、墳丘の盛土材料と版築状瓦層の確認、墳丘テラスの位置や構造などをあわせて調査検討を行うこととした。今回の調査範囲がちょうど前方後円墳の主軸線に沿って截断するような形となるた



め、当時の墳丘の考え方や構築方法及び順序など貴重な調査資料となり得るものと期待した。

発掘調査の着手時期については、現在急斜面であること、古墳築造時の地山の位置が標高約18メートルにあり、大念寺園境内との差が約6メートルあることにより調査時の足場となる擁壁等の工事を先行し、完了した時点で発掘調査に着手することとした。

南側墳丘調査

南側墳丘崩落部分は、前方部、後円部斜面の數カ所に大きく抉り取られたように流土、流失している個所が見られる。特に墳丘裾部、前方部墳丘と後円部墳丘が交わる隅角部が破損がひどく、遺構と思われる版築状互層が一部、露出、風化を受けているような状態である。

修理にあたっては、新しく補修、充填する盛土との関係において現状の表土と遺構面の深土、表土の除去可能範囲の確認が必要であり、表土の風化、崩落状態、遺構面の状態など主な調査目的となった。

調査は、設計図書作成のため、事前に墳丘斜面に簡単なトレーナーを設け遺構面の検出、確認を行った。また、修理工事にあたって、露出している崩落個所の遺構観察、工事における表土除去時の墳丘遺構の清掃、観察を行うこととして、版築状互層盛土やテラスの構造について記録することとした。

なお調査の計画においては、今回の墳丘遺構の確認により前回の石室羨道部の発掘調査結果を踏え、大念寺古墳のように横穴式石室を主体部にもつ古墳の築造過程の問題や想定される築造当時の景観など調査項目とし、あわせて、墳丘を形成する各種材料土の土質分析調査、封土の磁気測定による築造年代の想定など、修理工事にあわせて可能な限りの調査内容を検討、計画した。



磁気測定試料採取風景

●工事計画

修理に伴う工事箇所は、北側墳丘の割落面においては大念寺本堂建物、南側墳丘崩落部分については墓地、墓石が接近し、工事においては、限られた範囲で設計及び施工計画する必要があった。工事計画においては、恒久的な遺構の保護を目的に横穴式石室の崩落防止と墳丘斜面の安定を主目的として計画した。

北側墳丘崩落面

北側墳丘の新たに計画する法面、擁壁位置については、露出している石室奥壁の土被りを1メートルの厚さにすることにより決定した。擁壁については、既存の擁壁の前面に新たにコンクリートによる擁壁を設け、既存の法面コンクリート板については浸透水の水道となる危険性があるため撤去することとした。

盛土方法については、墳丘盛土遺構面にあたる個所は調査結果を踏まえ、同様の材料を採取して工法的に可能な限り当時の工法を踏襲する。特に石室の裏込盛土の仕様など土質分析等による調査結果を踏まえ、工法的な再現を図り一体構造としての安定化を図るものとする。また墳丘の地山位置に当る擁壁裏の盛土については一般盛土（マサ土）による強固な締固めとする。

盛土斜面の安定については、盛土表面に法枠ブロック組立による崩落防止を図りあわせて張芝による流土防止を行うこととした。雨水等の排水についても、新たに法面小段や大念寺境内側に排水枡、排水溝を設け、計画的に排出することとした。

南側墳丘崩落面

南側の墳丘崩落箇所については、墳丘盛土遺構の保存のため、遺構面を覆う風化崩落している表土の除去範囲と、新たに盛る保存盛土と既存盛土の一体化についてその修理方法が検討された。

斜面崩落による盛土の施工方法については、既存の地形に段状に根代りを行い、新たに盛る土との摩擦係数を高くし崩落を防ぐ方法が最良と考えられた。今回の保存盛土工事における問題は、遺構面との関係において遺構を破損することなく表土をどの範囲まで段切ることが可能かが課題となり、前方部、後円部についてはトレンド調査結果を参考とした。流土が著しい崩落箇所については事前の遺構観察の上、切土を行った。盛土仕様については、北側墳丘の調査結果を参考にし強固に層状に締固めを行うこととした。また保存盛土施工面は、雨水等による流土防止のため、張芝等による表土保全を図ることとした。

今回の保存修理工事においては、敷地条件から施工範囲が制限され、現状遺構の位置が斜面上に立地するなど、施工においては工程計画や進入路、サービスエリアの確保に重点が置かれることとなった。また斜面上での施工が多くなるため、安全面の配慮や人家に接することによる工事期間中の注意事項など、十分計画、検討されることが望まれた。

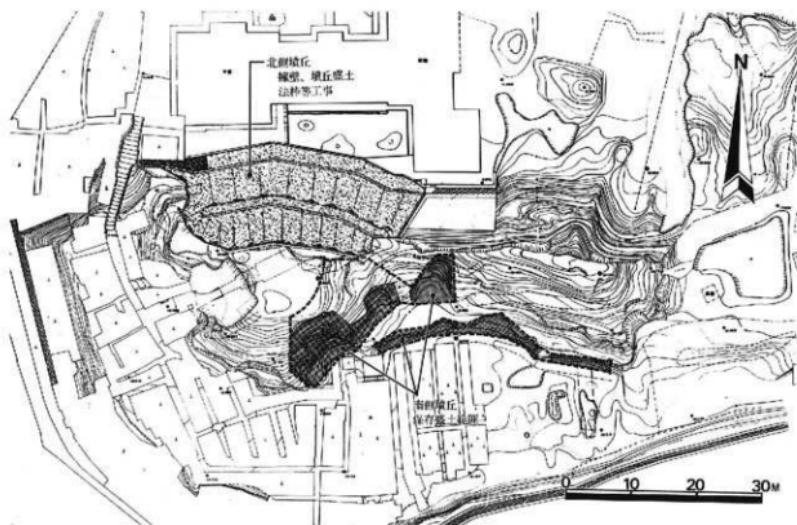


図16 工事計画平面図

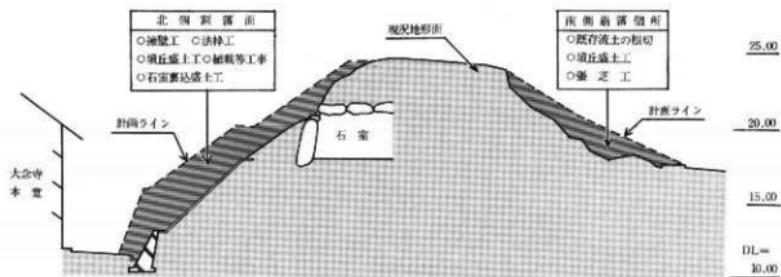


図17 同断面図

3.3 組織

修理に伴う発掘等調査及び修理工事は、出雲市が事業主体となり、担当が出雲市教育委員会となり調査及び工事発注を行った。

なお、修理事業にあたっては、文化庁記念物課、奈良国立文化財研究所、島根県教育委員会文化課及び島根大学各研究室等、指導・協力を仰いだ。

事業の関係者は、次の通りである。

| | |
|------------|----------------------|
| 指導 | 山本 清 (島根大学名誉教授) |
| | 渡邊 貞幸 (島根大学助教授) |
| | 門脇 俊彦 (島根県文化財保護指導委員) |
| | 黒谷 達典 (出雲二中教諭) |
| 文化庁記念物課 | |
| | 牛川 喜幸 (前・文化財主任調査官) |
| | 安原 啓示 (文化財主任調査官) |
| | 加藤 允彦 (文化財調査官) |
| 奈良国立文化財研究所 | |
| | 町田 章 (平城京発掘調査部長) |
| 島根県教育委員会 | |
| | 福田 治夫 (前・文化課長) |
| | 美多 定秀 (同上) |
| | 黒谷 正弘 (文化課長) |
| | 川原 和人 (同係長) |
| | ト部 古博 (同 文化財保護主事) |
| | 鳥谷 芳雄 (同 主事) |
| | 若槻 真治 (同 主事) |
| 協力 | 三浦 清 (島根大学教授) |
| | 伊藤 晴明 (島根大学教授) |
| | 時枝 克安 (島根大学助教授) |
| | 曾出 文夫 (大念守住職) |
| 出雲市都市計画課 | |
| | 曾田 礼三 (前・都市計画課長) |
| | 原 武 (都市計画課長) |
| | 富田 美延 (前・同 技師) |
| | 石橋 猛博 (前・同 技師) |
| | 矢田 太郎 (同 技師) |

事務局 出雲市教育委員会

今岡 清 (前・社会教育課長)
奥井 正之 (同 課長)
来海 弘明 (前・同 係長)
須谷 忠 (前・同 係長)
片寄 治紀 (前・同 主事)
川上 稔 (同 主事)
三原 郁美 (同 主事)

発掘調査 川上 稔 (出雲市教育委員会)
角田 徳幸

修理工事請負、受託業者

設計監理 文化財保存計画協会
施工請負 (株)トガノ建設

3.4 事業費

修理事業に伴う事業費は、国庫、県補助金を受け、昭和59年度から昭和62年度までの4カ年事業として行った。

事業費の内訳は次の通りである。

歳入

| | 昭和59年度 | 昭和60年度 | 昭和61年度 | 昭和62年度 | 合計 |
|-------|-----------|------------|------------|-----------|------------|
| 国庫補助額 | 3,500,000 | 5,000,000 | 6,500,000 | 4,000,000 | 19,000,000 |
| 県補助額 | 1,750,000 | 2,500,000 | 3,250,000 | 2,000,000 | 9,500,000 |
| 市負担額 | 1,750,000 | 2,500,000 | 3,250,000 | 2,000,000 | 9,500,000 |
| 合計 | 7,000,000 | 10,000,000 | 13,000,000 | 8,000,000 | 38,000,000 |

歳出

| | 昭和59年度 | 昭和60年度 | 昭和61年度 | 昭和62年度 | 合計 |
|-------|-------------------------------|--------------------------------|---|-------------------------------|--------------------------------|
| 総事業費 | 7,000,000 | 10,000,000 | 13,000,000 | 8,000,000 | 38,000,000 |
| 調査費 | — | — | 1,010,260 | 476,950 | 1,487,210 |
| 設計管理費 | 1,000,000 | — | 1,400,000 | 1,750,000 | 4,150,000 |
| 工事費 | 5,915,000 | 9,924,000 | 10,520,000 | 4,297,000 | 30,656,000 |
| 事務費 | 85,000 | 76,000 | 69,740 | 1,476,050 | 1,706,790 |
| 備考 | 工事期間 S60.2.14 ～S60.3.25 | 工事期間 S60.11.30 ～S61.3.14 | 調査期間 S61.6.2 ～S61.6.28 S61.11.17 ～11.28 | 調査期間 S62.8.11 ～S62.8.28 | 工事期間 S62.11.24 ～S62.1.21 |
| | | | 工事期間 S61.6.17 ～S61.9.15 | | |